

## 第九章　そして、緋の黎明へ

ワイゲルマン艦隊による『ルシタニア』号襲撃は、共和国と連邦との關係を決定的に悪化させた。連邦上院外交委員会は、  
「連邦が公式に保護を声明し護送したコーテイリア・バードフェザーを、あるうことが連邦圏深部にまで追撃し殺害するの暴挙を敢えてするに至っては、ル・ラント共和国は外交相手として全く信任に値しないといふべきではない」

との意見具申を大統領に対して行い、「連邦大統領は、遅くとも一年以内に対ル・ラント共和国開戦の準備を完成するよう、あらゆる努力を支払うべきである」との勧告を行つたのである。

「無謀である。そもそも、共和国の内政を無視してコーテイリア・バードフェザーの亡命を認めた連邦の外交に問題があつた。今一度の譲歩がならぬかどうか、真剣に検討するべきではないか」  
慎重論を唱えるレイフレム・ナイザル・ネレイドの意見も、外交委員会、更には連邦上院の大勢を覆すには至らなかつた。

連邦曆五六九年五月四日（共和国曆七一九年一月一日）、連邦上院は圧倒的多数で共和国との外交關係の断絶を可決する。翌日、下院も上院の決定を支持する議決を行い、リー・タウナー大統領は、フェルトリック・キャスパー駐ル・ラント大使に全外交團の引き上げを命じる。もはや、全面開戦への道をさえぎるものはないにもなくなつたと言つてもよかつた。

一方の共和国でも、開戦の不可を訴えるアリシア・ミュッケルらの声は、よりおおきな声で喚き立てる主戦論者たちの怒号にか

き消されてしまつていた。共和国曆一〇月二〇日、共和国宇宙軍参謀本部の強硬意見に押されるままに、共和国政府首席ヒューレット・ザークは、連邦への最後通告を手交する。もつとも、

「この通告は両国間の戦争状態を意味しますが……？」  
そうキャスパーに反問されたときのシユジュケイ外相の反応は、  
「前例を調べてみないと何とも言えません……」

であつたという。悪意に発した噂かもしれなかつたが、「前例にしたがつて戦争をする外相」との噂は、特にマールク艦隊の將兵の間で広く囁かれ続けることになる。政府からの開戦命令を受け取つたマールクは、しばらく宙を仰いで動かなかつた。ややつて、執務デスクの引き出しからブランデーのビンを取り出し、荒っぽい手つきで紙コップに中身を注ぎこんだ。

「閣下……」

ミュッケルの声を無視して、紙コップを一気に傾ける。

「馬鹿馬鹿しい。何でだ、ネイ。どうしてこんな戦争をしなきゃいけない？ 何人死ぬと思つている？」

「……」  
「これはゲームじゃない。シミュレーションなら、何部隊全滅させられようとも、人死にはでない。ゲームじゃない。一個艦隊全滅すれば一〇〇万だぞ。しかも、一〇〇万人で済む筈もないじゃないか」

「閣下であれば……必要最小限度の損害で、この戦争も収めてくださるだろうと期待したいのですが……」

「心にもないことを言うね、ネイ」

別の紙コップになみなみと注いだブランデーを、マールクはミュッケルに差し出す。

「飲まないか」

「執務中です」

「知るものか。上官の命令だ。飲め」  
「むちゃくちゃですね」

蒼白な顔に、ようやく苦笑を浮かべ、ミュッケルは紙コップを受け取る。余りアルコールに強くない彼としては、マールクのような飲み方を真似するわけにはいかない。

「ヒースを首将として、例の作戦を敢行しろ、と言ってきてる。

第二艦隊ではなく、新規編成の“シエルメス攻略派遣軍団”を連れていけ、だとき。ヒースを呼んでくれないか、ネイ。明日の朝でいいが」

「今すぐでは？」

紙コップの中身の残りを喉の奥に放りこみ、マールクはふらりと立ち上がる。

「たまにはふて寝ぐらいさせてくれ。今日は、もうどうにも仕事をする気になんかなるもんか。後を頼む」

「了解です」

ちよつと危なかしい足取りで長官執務室を歩み出ていくマールクの背を、ミュッケルは敬礼で送る。ミュッケル自身、酔っ払いたい気分だった。大勝利を謳われた“ドライバオム回廊宙域会戦”でも、味方の死傷者は数十万人に上ったのだ。数十万の人生と、それに繋がる無数の肉親の人生、それを左右する立場にある。指揮を一つ間違っただけで、いや間違わなくとも数万の生命に一瞬に中断を強制してしまう艦隊指揮官。その立場を自覚したとき、ミュッケルは凍り付くような寒気を覚えたものだ。寒気は去らず、なお強まる一方である。

そしてマールクは……マールクは、ただ一個艦隊を指揮すればよいミュッケルよりも更に重い責務を負っている。彼は、まさに「共和国を滅ぼすのに半日あればよい」立場にいるのだ。

ブランドーを睨り、ミュッケルは、ヤンデキフィティがもたら

した連邦圏の壮麗な星域図を思い出す。あれほど無数の星がある。連邦とて全てを支配しているわけではないだろうし、両国合わせで四〇〇億の人口を煩わしいと感じるほど、銀河が狭いわけではないだろうに……

「……痛っ」

どのくらい気を失っていたのか分からない。頬に冷たいものを感じて、目を開く。

「……！」

真っ暗だった。一瞬、視力を失ってしまったのかと錯覚し、動転するが、わずかに生き残っている計器の明かりが視野に入ってきた。エア・クツシヨンに包まれていたが、それでも全身が打撲の苦痛を訴える。だけでなく、左腕がどうやら折れているらしく、吐き気を伴った激痛が頭の芯にまで突き抜ける。

おぼつかない手つきでコンソールを操作する。操作系は完全に死んでいるようだったが、それでもエア・ロックの開放されるシューツと言っ音が聞こえてきた。

一瞬、大気を持たない、あるいは呼吸できない大気を持った惑星への不時着。そんな可能性が脳裡を過ぎったが、いずれにしても自分が瀕死ではないにしても重傷の身であることは直ぐに分かった。このまま救命艇内においても、長くはない。それに、不時着直前に見た惑星の昼側の半球は、鮮やかな青と緑に彩られていたのだ。

同時に非常灯がたよりない光をコクピットに投げ付ける。ひどい壊れよう。展望窓は地面に食い込み、コンソールの大半がパネルを吹っ飛ばされ、計器は粉々になっている。これでよく生命が

あったものだ。

安全ベルトを外す。破壊されたコンソールが、左腕をシートの間に挟みつけていた。渾身の力を振り絞ってコンソールを押し退け、傷ついた左腕をそっと引き抜く。目も眩むなどという言葉では表現できないくらい凄まじい激痛に、コーティはしばらく歯を食いしばって呻吟した。

ファースト・エイド……取り敢えず、傷ついた左腕を固定し、痛み止めを飲む。気休めだがないよりはまし。サバイバルキットのケースを引つ張りだし、とにかく救命艇を這い出した。闇夜の星空が物凄い。共和国母星で見るとは桁違いの、物凄い満天の星、星、星……びつくりするくらいの静寂。鳥の羽撃き、野生動物の遠吠え、一切聞こえない。地上車の騒音、人の叫び声、航空機の轟音も……完全な無人惑星なのかもしれない……コーティは少なくとも臆病ではなかった。しかし、完全な無人惑星に一人きりという想像は、さすがに彼女を怯えさせる。

「……！」  
遠くに灯。見間違え？ いや、やはり見える。ちらちらと揺れている。人為の灯。ひよつとして宇宙海賊のアジト？ 構うものか、どうせ、もう失うものはなにもない。

全身の上げる抗議の悲鳴を無視して、コーティは歩きだす。一歩毎に歯を噛みしめ、苦痛の呻きを噛み殺しながら。揺れる灯りは果てしなく遠かった。途中、小川に遮られた。踏み込んだのはいいが、全身が凍てつくような恐ろしく冷たい流れに思わず悲鳴を上げる。川から上がったとき、下半身の感覚が半ば失せ、自然と歩む速度は緩慢になる。苦痛の余りに感覚が完全に麻痺していて気づかなかつた。この惑星は、今、冬らしかった。それも極く厳しい。

「頑張れ、コーティ。こんなところで死んだりしたら承知しない

から！」

口に出して自分を励ました。ふと脚を止める。踏みしめる感触が違っていった。剥き出しの土ではない。砂利を敷き詰め、押し固めた程度かもしれないが、一応舗装されているではないか……

「あは、やつぱり……あたしがついてるんだ」

目の前に、めざしてきた灯りがあつた。建てて間のなさそうな木造の小屋……ずっと前、何かの写真集で見たことがある。山小屋とかいう建物をいくらか大きくしたような。灯りは窓から漏れていた。化石燃料を燃やす原始的な灯りではなく、見慣れた連邦の照明パネルらしい。

言うことをきかない身体を、小屋の入り口まで引つ張っていったのは意志の勝利だった。何度も休んだし、それ以上の回数、道路のうえに倒れ込んだ。倒れ込んだままでは凍死していただろう。ノック。返事がない。もう一度……

「誰だ、今ごろ？」

連邦公用語。辛うじて聞き取れる。ドアのノブが回り、誰かが姿を現したとき、コーティの気力の最後のひとかけらが尽きた。視界が急激に暗くなり、膝から力が抜ける。

「誰だ、あんた？」

誰何の音が遠い。宇宙海賊にしては粗野じゃない。犯罪者にしてはいやに朴訥そう。

「コーティ……コーティリア・バードフェザー……」

言つたつもりだったが、通じたかどうか自信はなかつた。とつとくに限界をこえた苦痛に耐えてきた彼女の意識は、そのまま慈悲深い失神の海の奥深くへ逃げ込んでいく。

くたりと力を失い、腕のなかに倒れ込んだ。見知らぬ少女を、小屋の主人は持て余したように抱き抱えていた。惑星開拓期の第

一期農民にだけ見られる武骨な体躯と、これは純粋な農民とは決して思えぬ危険な視線を放つ目の持ち主。

「どうしたの？ 誰？」

これも農家のおかみさんという雰囲気の中年の女性が奥から姿を現し、コーティの姿を認めて啞然とした表情を作る。

「コーティリア・バードフェザーとか言った」

「バードフェザー？ 聞いたことがあるよ。先日、配給船がファックス・ペーパーを置いてっただろ？ ル・ヤントとか言う国から亡命しようとしている女の子がいるとか。その子の名前が確かバードフェザーだったと思うよ。珍しい名前だから覚えてただけだね」

「そういう珍しい名前が幾つもあるとは思えないな。話はあとで聞くとして……どうするかね？」

「さあねえ……」

「おかみさん」は太い両腕を組み合わせる。

「シエルメス人ならこのままその辺に放り出して凍え死なせるんだけどね」

「確かに。カルシユ人がシエルメス人を救わなければならない理由はないな。人間は人間を救うべきだが、獣以下の畜生を救うる謂れはない。このお嬢ちゃんがル・ヤント人だしたら、カルシユにとつていまのところ何の関係もないな」

「じゃ、議論することじゃないじゃないか。さつさとその娘を寢室へ連れておいきよ。だいぶ凍えてるみたいだし、怪我もしてる。早くしないと死んじまいそんな顔色だよ」

「わかってるって」

「あるじ」は、完全に気を失っているコーティを抱き上げなおした。リン中佐が惑星エムスを指して「重大犯罪者の流刑星」と

呼んだのは誤りではない。エムスは、連邦政府に抵抗して叛乱を起こした、惑星カルシユの政治犯達の流刑星だったのである。連邦政府は、九次にわたるカルシユでの暴動で数十万の政治犯を逮捕し、そのほとんどを辺境の惑星に送りこんで原始的な開拓作業に従事させていたのである。コーティリア・バードフェザーの逃げ込んだ惑星エムスは、そうした惑星の一つだった。

コーティリア・バードフェザーの名前は、これで一旦、歴史の表面から姿を消すことになる。連邦暦五六九年一月一日、共和国暦七二〇年一月二一日、ル・ヤント共和国宇宙軍の勇将ヒースクリフ・ローナクは連邦圏エルメティア宙域を奇襲攻撃する。世に言う、「前期銀河系大戦」の開幕である。間近にせまった共和国と連邦との全面戦争の前に、その全面戦争の引き金を直接引くことになった一少女の名前など、両国の市民の脳裏からはすみやかに消え去ってしまったのだ。